

キリストの聖体 ヨハネ 6：51～58

今日は、キリストの聖体を記念しています。聖体の由来と意味を学びましょう。

イエスが聖体の秘跡を制定されたのは、最後の晩餐の席です。この晩餐は、ルカ福音書では「苦しみを受ける前に、あなた方と共にこの過越しの食事をしたいと、わたしは切に望んでいた。」(ルカ 22：15) というイエスの言葉で始まっています。イエスは、公生活の間、たくさんの人々と食事をしましたが、そのほとんどがお客様の立場で、最後の晩餐だけイエスは自分で主催して、弟子たちをもてなしました。「苦しみを受ける前に」の言葉で分かるように、イエスは自分の受難と死を覚悟しています。ユダの裏切りも知っていて「決死の覚悟」で食事をもてなします。その「決死の覚悟」で、自分のいのちをパンとぶどう酒の形で、愛の業にしたのが聖体です。ですから、数時間後の受難と死があって、聖体には意味があります。切羽詰まったギリギリのところで愛の結晶、ご聖体が生まれました。だから、ご聖体をイエスの「愛の形見」と呼んでいますし、それだけ愛が詰まっています。新型コロナ・ウイルスの影響でご聖体から遠ざかって寂しい思いをするのも、「愛の形見」を受け取れないからでしょう。カトリック教会は、イエスの遺言を 2000 年間守って「愛の形見」を人々に分け与えてきました。

さて、この「愛の形見」は、わたしたちキリスト者だけのものなのでしょうか？ いま苦しんでいる人に意味があるのでしょうか？ モノのあふれた社会の中で、必死に働いている人たちは「愛の形見」とどうつながるのでしょうか？

ドロテー・ゼレという女性の神学者はこう言います。「人はパンのみによって生きるのではない。それどころか、人はパン（生活の資を稼ぐこと）のみに生きることによって死んでいる」(『内面への旅』新教出版社、P11)。 厳しい競争を生きるためにみんな必死で闘っています。でも、人生何のために生きているのかわからなくなる人もいます。サラリーマンの時の私もそうでしたが、ひた走っているのにどこにたどり着くのかわからなくなっていました。モノは豊かでも、心の中は渴いていました。わたしたちは、生きる目的を見失った人たちにも、イエスのいのちを伝える使命があります。

ご聖体は「ホスチア」とも言いますが、ラテン語で「いけにえ」という意味です。旧約の時代、動物や動物の血を「いけにえ」として神に捧げていました。イエスは動物の代わりに人類の罪を贖う「いけにえ」となって下さいました。自分のいのちを、人類を救うために捧げました。私たちも、世の中の救う「いけにえ」になりましょう。新型コロナ・ウイルスで生活が変わってしまったベトナムの若者たちを支えましょう。

ミサが終わると、社会や家庭に戻っていきます。それはイエスのいのちを人々に伝えるためです。価値観が違う家庭・職場で福音を伝えることは大変ですが、それこそイエスが「いけにえ」となられたように、わたしたちも相手に自分を捧げましょう。

「愛の形見」をありがたいの気持ちで拝領して、イエスの愛を伝えていきましょう。